

島に伝わる「白いも」を 交流の架け橋に

大島の特産品「白いも」を使った焼酎やお菓子が徐々に知名度を上げている。白いもの栽培から加工まで、この活動は大島と新居浜市の人たちとの協働によって進められてきた。「島が元気になることで、新居浜全体が活性化する」。一部離島での地域づくり、抱える課題を互いにアイデアを出し合い、知恵を絞ることで解決に導いていく。

愛媛県新居浜市 矢野鐵二

まず地図を出していただいて、本州と四国の架け橋「しまなみ街道」と「瀬戸大橋」に挟まれた四国の北側、中ほどのへこんでいるところ、新居浜市にいへのところを良くご覧下さい。周囲一〇キロほどの小さな島が見えると思います、この島が「大島」です。その昔、村上水軍の頭領・村上義弘が生まれた島ともいわれ、船隠し・のぼり立・明火・本丸跡・二の丸跡などの地名が残っています。古くからの良港として栄え（昔は周辺の島をふくめ

大黒島とも呼ばれていたそうです）、海運の要となっていました。そのせいか、島内にはいくつもの神社やお寺があり、昔領土を取り合いました名残ではないかといわれています。遠くは中国、東南アジアまで海を渡り、太鼓祭りやだんじり祭りなど、多くの文化を伝えたともいわれています。また、長崎などに親戚がある家も多く、青い目の子どもの話、幽霊の片袖の話など多くの民話や伝説も残っています。

■元気に老いていける 島づくりを

多いときは二〇〇〇人あまりだった大島の人口は、今では三〇〇人ほどになり、現在の小学生は二人、高齢化率もかなり高い地域となっています。ともすれば、行政からも忘れられがちになり、自分たちでは何もできないと、行政にあれをしてくれ、これをしてくれと要望をいうばかりで、その要望も通りにくい。救急の時には漁船に戸板で病人を対岸の黒島港へ運び、そこから救急車で病院へ搬送する。「大島はほっとかれとるんじや」、そんな声が聞かれていたのが一〇年ほど前の大島でした。

そんな大島が変わりだしたのは、後にNPO法人「わくわくアイランド大島」となる、香西さん（初代理事長、平成一五年没）を代表とするグループが出来たことでした。「わしら年寄りでも出来ることはある。何からでもやって、元気に年取っていける、年寄りが安心して住める島にしようや」の掛け声のもと、「何が出来るかわからんけどやってみるか」と、賛同者が集まり活動が始まりました。

活動を始めて直面したのが、活動資金の問題でした。何をするのにも材料費や経費の負担がある、メンバーの持ち出しばかりでは長続きは難しい。そこで目をつけたのが、島内一周道路の整備事業でした。その当時、島内

一周道路の整備事業は、市内の業者などが市から委託を受けて行っていました。それを自分たちでやれないかと考えたのです。そのためには、NPOの法人格を取り、市の信用を得る必要があります。その結果、平成一二年四月、大島に特定非営利活動法人「わくわくアイランド大島」が誕生し、貴重な資金源となる市との協働事業を獲得しました。大島に住む人たちが、自分たちのために、自分たちが使う島内一周道路の整備を自ら行い、草刈りや整備に汗を流したことにより、その結果、今まで以上に道幅も広がり、快適に車も通行することができました。島の住民だけではなく、島外から釣りや海水浴、ハイキングに訪れる方たちにも喜ばれています。この協働事業は、現在も続いています。

■島と陸地部との 交流が始まる

一方、陸地部の新居浜市では平成九年、地元有志が集まってボランティアを支援する中間支援NPOとして「GOODWILL」が設立されました。地域ボランティア団体への財政支援、広報支援、情報支援、活動支援、ボランティア政策提案など五つの支援事業を行うことを目的としています。NPOの法人格は、平成一一年に愛媛県では二番目に獲得しました。

「今の島は、先の新居浜市である。今、大島を見捨て

ると、何十年かあとの新居浜市も日本の国から見捨てられる」との白石理事長の一声により、大島との交流が始まりました。最初のうちは、地域通貨の導入などをしていました。

次に、島内にあるクスギの大木などを利用したカプトムシ農園事業、シイタケ栽培などを行いました。この頃から、私も積極的に参加し始めました。

カプトムシ農園事業では、まず、カプトムシ小屋を作るために藪を切り開きました。「こんなところ、どないもならんでー」と思うようなところが、島のお年寄りたちが草刈機を使うと見る見る開けていきました。このとき、



水質の浄化に活用している酵素活性剤「わくわくアイ」。

「島の年寄りには元気やナー」そして、「これは自分たちの何十倍も早い、絶対勝てんナー」と実感しました。作業が終わると心づくしの炊き出しで歓迎してくれました。和井田の浜で食べた、いりこ飯やえびのかき揚げのおいしかったこと、いっぺんで島が好きになりました。

シイタケ栽培では大きなクスギの木を伐り倒し、シイタケのほど木作りをしました。大きな生きた木を伐り倒すのは初めてで、チェーンソーもあまり使った経験はありませんでしたが、教えてもらいながらクスギを伐り倒したときは、すごく感動しました。伐り口から水がどんどん流れ落ち、こんなにもたくさん水を吸い上げていたのかと、樹の生命力の強さを感じました。その後、適当な長さに伐り分け、担ぎ上げました。生木の重さを痛感しました。しばらく乾燥させた後、ドリルで穴を開け、種菌を植え付け木陰に置いておくと、驚くほどのシイタケが生えてきました。そのシイタケのおいしかったこと。この二つの事業は、うまくいけば活動資金にとの目論見でいきましたが、しかし、どちらもうまくはいきませんでした。

それから、何かあるごとに島を訪れるようになり、島の皆さんにいろいろな話を聞かせてもらいました。大島の地名や歴史、言い伝えられている民話などを教えていただき、新居浜市に住んでいながら、日常ではなかなか行く機会のなかった大島のすこさやすばらしさを感じ、

ますます大島が好きになりました。

■微生物を活用した 水質浄化プロジェクト

島の人と仲良くなるにつれ、「島には下水がない、下水の通る予定もない、生活廃水で汚れる一方の海をきれいにしたい」「生ごみの減量化をしたい。島から出るごみを少なくしたい」、そんな声が聞こえてくるようになりました。

そこで平成一四年、生ごみの減量に、新居浜市で半額補助を行っているコンポストの利用を提案しました。水の浄化には「えひめA I I 1」（当時の愛媛県工業技術センター所長の曾我部義明氏が開発した環境浄化微生物菌）のモニターとしての導入をサポートしました。「えひめA I I 1」は生活廃水とともに流すことにより、腐敗菌の繁殖を防ぎ、自然界に元々いる有機物などを分解する微生物を活性化し、川や海を浄化する画期的な発明です。この技術は今では県内だけでなく日本中、そして世界にも広がりを見せています。大島では当初、原液を工業技術センターより搬送し、島内のタンクで一〇倍に露地培養していました。この方法では気温の高い時期には培養できませんが、寒い時期には培養できなくなってしまう。そこで、平成一五年に日本財団の補助を受け、愛媛県の工業技術センターにあるプラントと同じ仕組み



アマモの苗づくりの様子。

の1トンタンクを二基据え付け、ヒーターやポンプも設置された本格的なプラントを完成させました。

島内で「えひめA I I 1」を活用した成果として、排水路のヘドロが減り、糸ミズがわいて、砂地が見え出した箇所が見られるようになりました。合併浄化槽を設置している家では、点検に来た業者の方が、「今年は汚

泥が少ないのでバキュームする必要がありません」と言われたと聞きました。また、島の東側で一時期いなくなっていた岩が戻ってきた、島の周囲で海藻が増えた、などの効果が出てきています。

平成一八年八月には、大島周辺の海の環境をよりよくするために、愛媛県中予水産試験場にお願ひして、アマモ場作り事業を行っていただきました。アマモとはイネ科の植物で、一度陸に上がった植物がもう一度海に帰って生活し、花をつけ種を作り、地下茎などでも繁殖していく海藻です。昔大島周辺でも群生していたそうですが、現在では一本も残っていないようです。この海藻が生えることにより、水中の有機物を取り込んで水をきれいにし、二酸化炭素も吸収して地球温暖化の防止になります。また、魚の産卵場所や稚魚の隠れ家、アサリなど貝の幼生の着生物となることで貝が増えたり、植物を元気にする「えひめA1」との相乗効果により、ますます海が元気できれいになる効果が望めます。アマモ場作りの様子とその後の生育状況は、愛媛県中予水産試験場のホームページ内、藻場作り事業のなかで紹介されていますので、興味のある方はご覧ください。

今年、「えひめA1」の事業では新しい展開を迎えています。昨年度より家庭でも作れる「えひめA1-2」のレシピが工業技術センターで発表されました。元々曾我部先生が自宅で開発して使用していたもので、「えひ

めA1-1」より香りが良く、家庭での普及にはこちらのほうが適しているとのことでした。大島でも「えひめA1-1」の効果は分かっていますが、今ひとつ女性の間で人気がなかったのですが、「えひめA1-2」を作り配布したところ大変評判が良く、お風呂の入浴剤代わりに入れると肌がすべすべして美人になると、今まで以上に使用してくれました。そこで、島内だけではなく普及していくために、「わくわくアイ」と命名して販売事業に乗り出すことになりました。ラベルやキャップを手配して、本体のペットボトルは再生品を洗って使用することになりました。ここで、曾我部先生の思いでもある「えひめA1-2」で、障害者の方たちにもなにかサポートになることはできないかと考え、市内の精神障害者授産施設に協力をお願いし、ペットボトルの洗浄作業をしていただき、少ない金額ではありますが買い取らせてもらい、販売の仕組みの一翼を担っていただくことになりました。「わくわくアイ」が売れることにより水や植物や地球が元気になり、その活動に参加する人間が元気になる、そんな仕組みができていけば良いと考えます。

■ 大島の特産「白いも」で 農業特区を申請

水質浄化プロジェクトが始まった頃、もう一つ、「島の特産品は、白いもとみかん、あとは漁業。その特産の

白いも畑も高齢化で耕作面積が年々減っていく、あと何年かしたら白いもがなくなるかもしれん」、そんな声もあがっていました。

白いもとは、大島の特産品でサツマイモの一種。明治時代にアメリカから持ち帰った品種で、アメリカ芋、七福芋とも呼ばれています。大島での言い伝えでは、江戸時代に鹿児島より来たお遍路さんがふんどしの中に隠し、持ち出したものが大島に伝わったとも言われています。皮が白く、甘味が強くて食味は良いのですが、収量が他の品種に比べると劣っています。また、不思議なことに、白いもは大島以外の土地ではうまく育ちません。島の土壌が関係しているともいわれています。

白いもを残していくため、まず特産品作りをしたらどうかと、みんな考えてきました。お菓子にしたらどうか、甘いから羊羹とか、サツマイモなら焼酎はどうか、などさまざまな意見が出ました。そんななか、実験的に平成一五年収穫分で焼酎を三〇〇〇本造りました。これが大変評判が良く、約一ヶ月で完売しました。白いも焼酎「あんぶん」の誕生です。ちなみに名前の「あんぶん」とは、禅語の「安分以養福（安分を以て福を養う）」に由来します。安分は本分に安んじること、安心ということに同じで、養福は福德功德、つまり善行を養い行うこと。真の安心はこうした日々の行為のなかに実現されるといいう意味です。まさにボランティアを支援する中間組織と

して長年、GOODWILLが掲げてきた使命とぴったりに一致することからの命名となりました。

ところで、この「あんぶん」の販売にはおまけの仕組みがあります。焼酎一本の売り上げごとに、一〇〇円がGOODWILLの「まごころ銀行ボランティア基金」に寄付されるのです。そうしてこの寄付金は、年一回助成を希望する市内のボランティア団体へ、事業内容などの公開審査会を経て活動助成されたり、アワードでの賞金となり市内のボランティア団体の活動資金となり、新居浜市のボランティアの力や志を活性化させています。「あんぶん」の売り上げはこの基金の重要な財源になっています。名づけて「飲むボランティア」です。ボランティアの新しい仕組みが出来上がりました。

白いものブランド化にも挑戦し、東京の百貨店で販売したところ大好評でした。「さあ増産」といきたいところですが、肝心の白いもの収量は限られています。大島の人たちだけでは生産量が減ることはあっても、増えていく可能性はありません。「それなら芋を自分たちで作るか」「もっと多くの人が芋作りに参加できる方法はないだろうか?」そんな発想のもと白いも特区の申請が行われ、平成一六年一二月に認定となりました。NPO法人の農業への参入は全国で二例目だったそうです。現在では、先駆けとなった取り組みのおかげで法律が変わり、企業やNPOの農業参入が認められるようになりました。

■ オーナード制度を導入、 指南役は島の農家の人たち

特区の認定を受け、白いもオーナード制度を導入しました。多くの方が大島に足を運び、白いも作りに参入し、島の活性化を目指しています。会員は、豊かな島の自然を舞台に自分で白いもを栽培する「ファーマー会員」、植え付けや収穫などを体験する「オーナード会員」、市外在住者が遠方から大島を支援する「ふるさと会員」の三種類です。市内の保育園などからも、ぜひ参加したいと要望があり、法人会員として参加していただきました。

NPO法人の農業参入、島の特産品を守る、などと島のお助けマンを気取り、農業に挑戦しました。しかし実際は、島の方に助けられてばかりでした。まず、芋を植えるといっても苗がないのでわけていただき、畑の作り方や肥料のやり方、苗の切り方、苗の保管、苗の植え方、水遣りの仕方、すべて島の方に教えていただきながらの作業でした。島の方も「特区のおかげでえらい目にあつた」などといいながら、快く教え、手伝っていただきました。農業の大変さ、天候や気候に左右され、「何年も白いも作ってきても毎年さらじゃ」と言われていた意味を実感

しました。三種類の会員制度のうち、ファーマー会員は現実では無理があることも分かりました。一人前に芋を作れるようになるのには何年もかかる、今やらないと本当に白いもはなくなってしまうなと思いました。

前途多難な農業参入ですが、焼酎を造り、毎年決まった量の芋を決まった金額で買い上げる仕組みができました。白いも農家は確実な現金収入の道が出来たと喜びました。なおかつ白いもの知名度が上がり、流通量が減ったことで、市場での白いもの単価が上がりました。その



大島産の白いもで仕込んだ焼酎「あんぶん」。

おかげでまだ少ないですが、白いもの畑を増やす人、新規に参入する方が出てきて、明るい兆しが見えてきています。

オーナー会員の方には、今まで二回の収穫を体験していただきました。大島に初めてきた方も多数いらっしゃいました。参加された方は芋ほりを楽しみ、大島の方の作ってくれた焼き芋を食べ、みかん狩りもして大島を満喫していました。島に子どもたちの走る姿があふれ、笑い声が響き渡り、島の人も元気づけられていたように思います。



白いもの収穫では子どもたちも大活躍。



白いものお菓子コンテスト。
女子中高生の評価はいかに？

■ 白いもの お菓子コンテストを開催

いろいろと手直しをしながらの白いものオーナー制度ですが、現在第三期目のオーナーさんを募集しております。「オーナー会員」年会費一万五〇〇〇円と、「ふるさと会員」年会費二万円の二種類での募集です。どちらの会員さんも、白いもの五キロと白い焼酎あんぶん五本が付いています。ご希望の方はNPO法人GOOD W I L Lまでお問い合わせください（文末参照）。「白いもの」は、甘みが強くとてもおいしいお芋です。「あんぶん」は甘い香りがして、飲み口のすっきりした、飲みやすい焼酎に仕上がっています。ぜひ一度会員になって味わってみてください。

大島の特産品としての白い焼酎は完成しました。そこで、さらなる白いもの特産品作りを目指し、GOOD W I L Lでは、白いもの手作りお菓子コンテストを企画しました。まず、白いものを使ったお菓子のレシピを公募しました。本格的なお菓子作りをしている方の見本付きのレシピ、まったくお菓子作りをしたことない方のアイデアだけのものなど、さまざまなものが寄せられました。

まったくの素人が書いたアイデアを実際に作り上げる、この難しい作業は、市内のお菓子屋さん三店の協力により成し遂げられました。そのお菓子をオープンキッチンで作り、参加者に試食してもらい、グランプリを選びます。このコンテストの審査員は市内の女子中高生にお願いしました。コンテストで菓子づくりを担当したお菓子職人は、「白いものは糖度が高くおもしろい素材。素人はプロには考えつかない発想をして、ユニークなお菓子ができる」と感想を話されていました。コンテストでは公募の一六種のなかから白いものムースがグランプリに選ばれ、この作品は限定でホワイトデーに市内の菓子店で販売されました。

このコンテストがきっかけとなり、市内の和菓子屋さんや洋菓子屋さんでは、白いもの収穫時期にあわせて白いものを使ったオリジナルのお菓子を販売するようになりました。白いもの収量が少ないので周年販売は出来ませんが、逆に旬を活かした限定販売という付加価値につながっています。また白いもの焼酎「あんぶん」でゼリーを作り始めた洋菓子屋さんもあり、なかなか好評のようです。

■ 課題は
活動を継続していくこと

大島での取り組みも着実に成果を結び、島の人も

元気に活動しています。しかし、これから、五年、一〇年と、この活動をいつまで続けていくことができるのか？ 新居浜市との協働事業である島内一周道路の整備事業も、年々「わくわくアイランド大島」の会員の負担となりつつあります。「わくわくアイランド」のメンバーで現在一番若い人は六七歳。せっかく芽が出た新しい取り組みを永く続けていくために、何か新しい島外のみなさんも巻き込んでの仕組みづくり、そんなことが出来ればと考えています。

おおしま 大島 data

新居浜市の東海上に位置する。周囲9.1km、面積2.13km²、人口316人（平成19年3月現在）。「新居大島」の通称がある。古代以来、燈灘唯一の良港として知られ、平安から鎌倉時代にかけては皇室領となっていた。島内は傾斜地が多く、集落は新居浜側に面した南部に密集している。好漁場に恵まれ、漁船漁業を中心に小規模多魚種の漁業が営まれている。



矢野鐵二（やの てつじ）

昭和42年新居浜市生まれ。昭和16年創業「矢野メガネ時計店」の3代目。（社）新居浜市青年会議所の監事、NPO法人GOODWILLの理事を務め、大島との交流事業、地元商店街の活性化などに取り組んでいる。